

外川目地区

佐々木左近と八木巻館

外川目の沢崎と板橋との間に「館」と呼ばれる山がある。この館は、八木巻館とっているが、沢崎館とも板橋館とも呼ばれることがある。頂上には、いくつかの平坦な段と、空堀の跡などが残り、規模は小さいが山城の形を残している。

承久三年（1221）、京都では後鳥羽上皇が鎌倉幕府打倒の兵を挙げたが、時の執権北条義時はこれを鎮圧し、後鳥羽、土御門、順徳の三上皇を、それぞれ佐渡、土佐、隠岐に流し（承久の変）、後堀河天皇を擁立して、独専的な政治を始めようとしていた。

佐々木四郎高綱（宇治川の先陣争いで有名）の子孫である佐々木左近は、このような義時に従うのを大変に嫌った。そしてついには、一党の佐藤、照井、多田、浅沼、藤原、山影、高橋、伊藤、下山、辺見、田中、中村、松原氏をはじめとして、その他の多くの郎党を引き連れてこの地に来て城を築いた。城は「八重垣」の意味を含め、木柵を八通りに巻いたことから八木巻城と称した。

臣下や一族は、周囲に邸宅を構えて八木巻城を守護し、非常に備えて高地に焚火をすることを合図としていた。その場所は現在の下中居・八木巻・旭ノ又などにあったという。

左近は、身の丈が六尺（約180センチ）あまり、年は十七とか十八で、大変な豪の者だったという。ある時、左近が達曾部宝泉寺の裏にあった、達曾部孫三郎という者の居館（高館という）前を通った時のことであった。

「佐々木左近とはわれのこと。年は十八、生き飽きた。喧嘩売る者あらば買う。買う者あらば売る」と大音声を上げた。これを聞いた達曾部の館主は、

「なまいきな奴め」

とばかりに後を追いかけた。そして、達曾部の中齋（なかさい）というところで休んでいた左近を見つけ、弓を引き絞った。左近はそれに気がついて、

「ここだ、ここだ」

とからかうように尻をたたいた。ところが、

「エイ！」

とばかりに放たれた矢は、不幸にも左近に命中してしまった。その傷がもとで、左近はあえなく最後を遂げたのである。中齋には、左近が矢に当たって討ち死にしたという水田があり、その水田には今なお決して馬を入れないと言われている。

また、八木巻城の東側には帳塚森（経塚森）という小山があり、頂上には相撲の土俵より少し小さいぐらいの、四角四面の塚が残っている。これは、左近が敗れた時に、宝物や重要書類を埋めた跡だと言われている。

（「おおはさま物語」、「宇瀬水神社由緒書」）